

エッセイ

ヨーロッパで 読解教材をつくる

北川 達夫



イラストレーション=上村奈央

いま私はヨーロッパ各国の人たちとともに読解教材をつくっている。その制作の過程では、いろいろな発見があつて、実におもしろい。

たとえば「スイミー」のような、みなが協力して大きな困難に立ち向かう物語がテキストだとしてしよう。そのテキストについての編集会議で、まずはゴールとなる発問のポイントについて意見を出し合う。H国の専門家は自信たっぷりに言った。

「大きな困難に立ち向かうのだから、協力もいたしかたないということだな。その苦渋の選択をどう評価するか。このあたりが発問のヤマだろう」

私はびっくりした。「協力」というと、なんとなく「良いこと」のような気がしていた。だが、「協力」とは「しかたなくするもの」であり、「苦渋の選択」だというのである。やはり個人主義のお国柄か。困難とは独力で立ち向かうべきものであり、協力をいさぎよしとしないのだろう——などと考えていたら、F国の専門家が思慮深げに言った。

「だれのもとで協力が成立しているかが問題でしょう。集団には指導者が必要ですからね。指導者としての適格性をどう評価するか、このあたりが発問のポイントでしょう」

もはや言葉もない。指導者の適格性など考え

きたがわ たつお 1966年東京生まれ。元外務省フィンランド専門官。日本教育大学院大学客員教授。現在は国際的な教材作家として、日本のほか中欧・東欧・北欧の各国で読解教材を制作している。

たこともなかった。「スイミー」でいえば、スイミーが指導者ということか。それにしても、この人たちには力を合わせることに美徳という発想はないのだろうか。そうこうするうちに、私の発言の順番がめぐってきた。しかたなく私も言う。「ひとりではできないことも、みなで力を合わせればできるという、協力することの美徳といえますか、そのあたりを読み取らせたいかなあ、と……」

さきほどからの強烈な意見に気圧されて、なんとも自信のない、子どもっぽい感じの意見になってしまった。これは一笑に付されるかと覚悟していたら、「なるほど、そういう見方もあるな」と、みながうなずく。最後に議長役のE国の専門家が言った。

「では、これまでに出了意見すべて踏まえて、できるだけ多様な価値観にふれ、それを評価できるような発問づくりをしていきましょう」

この議長の発言に、現在の欧米の読解教育の真髓が示されている。多様な価値観にふれること。そして、多様な価値観を評価すること。この二点である。

価値観は人によってさまざまであり、他人と共有する部分があれば、共有しない部分もある。また、国ごとに、文化ごとに価値観の傾向があり、それも国によって、文化によって実にさま

ざまだ。ここで紹介したように、「協力」という言葉ひとつをとっても、驚くほど多様な受け止めかたが存在するのである。

価値観が大きく異なると、コミュニケーションが成り立ちにくい。だが、世界がグローバル化し、社会が国際化するいま、それではやっていけない。たとえ自分とは異なる価値観であっても、それを受容し、評価し、自分の価値観とすり合わせることによって、対話を成り立たせていかなければならないのだ。

その技能を読解教育によって身につけようというのである。作品を通じて作者の価値観にふれ、可能なかぎり多様な観点に基づく発問により、さまざまな価値観にふれ、それを評価することを学ぶ。こうすることによって、読解教育は単なる作品の読み取りではなく、国際コミュニケーション教育になり、国際理解教育になる。国際コミュニケーションや国際理解というところ、どうしても英語教育にばかり目がいきがちであるが、多様な価値観の受容と評価も重要な要素なのである。いま話題のPISSA型読解力も、基本的にはこの発想に基づくものだ。

編集会議のあと、例のH国の専門家が私に言った。

「日本人を仲間に入れてよかったよ。なかなか変わった発想をするからね」